

## クモに夢中

この事例は、「森でクモを発見した子どもの興味が友達へと広がり、体の作りや巣作りなどに興味を深め、さらに表現へと繋がっていった」実践です。一人の子どもの言動を見逃さずに、受け止めたことから、一人の子どもの興味が他の友達に広がっています。さらに、友達や保育者と森での情報を共有したことが、クモをよく観たり、探究したりする姿に繋がっています。子どもたちを理解し、思いに添った保育者の援助や環境構成の工夫が、表現活動へと展開し、体験を豊かにしています。

## 社会福祉法人代々木鳩の会 鳩の森保育園

5歳児

都心にある神宮の公園の秋は、自然の変化があり、子どもたちを日々飽きさせない。トンボやバッタ、カマキリなど、昆虫探りに夢中という日々が続いた。そしていつしか、緑色や茶色のドングリが、子どもたちのポケットをいっぱい膨らませる日々となっていった。

## 場面1：発見と観察

## クモ発見！

## 美しさに魅入る

## 疑問



## 巣作りがみたい！

## 本当の巣作り作業がみたい



## 園で巣作りが見たい

## 思うようにいかないことと出会う

## 場面2：調べる

## 図鑑で調べよう

## 新たなことを知る喜び

- ・10月半ばのある日の夕方、Kさん（3歳児）が部屋の壁を歩くクモを黙ってじっと見つめていた。気付いた保育者が声をかけると、「クモの糸はどこから出てくるのかなあ」とつぶやいた。
- ・次の週、森の中を行くうちに木の枝から枝へと張られた大きなクモの巣と、その主であるクモを見つけた保育者が、「あっ、あそこに…」とKさんに声をかけた。
- ・子どもたちは、陽光にキラキラ光る大きなクモの巣の美しさに見ほれた。それを機に、他の子どもたちも、森の中を探索しながら、クモの巣を見つけては、「あった」「ここにもあるよ」と教えてくれる。いつしか「クモの巣発見散歩」のようになっていた。
- ・翌日の神宮散歩に図鑑を持っていくと、Sさんは張り切っていた。クモ発見を目指して歩くSさんに刺激され、他の子どもたちも、見付けると教え合い、一緒にじっと見入ることを繰り返した。
- ・図鑑を広げ、みんなで囲んで、「ほら、これだよ」と教え合っている。子どもたちのクモへの興味はどんどん広がり深まっていった。園でも、クモの話題が飛び交う中、クモブームは他のグループにも伝播し、クモ探索隊はどんどん拡大していった。
- ・「どうやって巣を作るのか見たい」と、子どもたちは連日、森の中でクモを観察しているが、クモは巣作りを見せてくれない。「中心からだんだん大きくしていくのか?」「外枠作りから始めるのか?」などと、子どもたちはクモが作業しているところを見たくてたまらない。
- ・11月上旬、待ちきれなくなった子どもたちは、大小8匹のジョロウグモを保育園に連れ帰った。大きい方が捕まえ易いため、大きいものが多かった（後にメスだと知った）。体の膨らんだ部分の柄も、細く長い足の縞模様も美しい。
- ・「クモを連れてきたよ」と嬉しそうな子どもたち。クモの巣作りを見せてもらうつもりでワクワクしていたが、全く予期していなかったことが起きた。クモたちが共食いを始めてしまった。子どもたちにとってはショッキングな現実。
- ・「ご飯の虫を入れてあげないと、こうなっちゃうんだよね」と言いながら、命の厳しさを子どもたちがこんな形で学んだことに、保育者たちは胸を痛め、もう少しクモのことを理解していれば…と悔やんだ。
- ・「どうやって巣を張るのか知るためには、調べればいいんだよ」と誰かが言い出し、子どもたちは図鑑のクモのページを覗き込んだ。字が読める子どももいるが、読んで理解するのは難しい。保育者に読んでもらおうということになった。「種類が12,000種もあるんだね」「足は8本。ふーん、節足動物っていうんだ。昆虫じゃないんだね」「えっ、目が8つもあるんだって」「どこにあるの?」などのやり取りをしながら、クモのことを知り、興味を深めていった。

もっと知りたい

いろいろな方法で調べる

保護者の協力

### 場面3：製作からごっこへ

クモを作ろう



本物みたいに作ろう



クモの巣を作ろう

クモになった気持ちで

より本物らしく



・「クモは糸をどこから出すんだろう?」「虫はクモの巣に引っかかって動けなくなってしまうのに、クモはどうして自分の巣で身動きできなくなったりしないのだろう?」など、巣の作り方の他にも、**知りたいことが次々と子どもたちから出された。保育者も一緒にクモに関する本を読んだり、ネットで調べたりした。**

・子どもたちは家族に、今やっていることや知りたいこと、疑問に思っていることを話していた。**保護者も協力して、一緒に調べてくれた。**そして、巣の作り方や糸を出すところ、巣の縦糸と横糸の性質の違い、クモは縦糸を使って移動するため、自分が糸に絡め取られることはないということなどを、子どもたちは知った。

・クモ研究が進んでいたのも、保育者がクモを作ろうと新聞紙を丸めていると、興味をもった子どもが集まってきた。そして、子どもたちは新聞紙の大きな塊と小さな塊をガムテープで繋ぎ、クモの胴体を作った。その上に紙を貼り、また重ねて紙を貼り、強化しながら形を整えていく。クモ作りには、様々なグループの子どもたちが参加していた。

・「**ここが糸を出す糸イボ**」「**目は8つだよ**」「**足はこの位置かな**」などと言い合い、クモ製作は進んでいった。他の職員が製作の場を覗くと、作りかけのクモを前に、口々に「クモ解説」をした。

・色を塗り、縞模様をつけると、一段とリアリティーが増し、大きなクモの出現となった。こうして誕生したクモは、クモ研究に夢中になっている子どもたちがいつも図鑑を広げている机の上に置かれた。その横には、「くもけんきゅうかい」と看板もできた。

・**飽きることなくクモの写真を楽しむ子ども、看板クモを眺めて触ってしばし過ごす子ども、手作りのメガネをかけて研究者になる子ども**など、年齢もグループも超越して、いろいろな子どもが「クモ研究会」に出入りするようになる。研究所員らしき固定メンバーもできてきた。いつの間にか研究所ごっこ遊びが展開していた。

・12月の「冬まつり」は、子どもたちが今、楽しんでいるテーマで取り組むことになった。「クモ」グループの子どもたちは、研究所活動をもっと充実させたいと願っていた。その一つとして、クモの巣を作りたいという声が出てきた。子どもたちと知恵を出し合い、ビニール傘のビニールを外した骨と柄だけのものを使うことになった。**傘の骨を縦糸に見立て、横糸を巻きつけていく**ことになる。

・子どもたちは、**クモになった気分でクモの巣張りをした。テグスを張ってみたが、クモの横糸のベタベタ感がなく、みんな納得がいかない。**そこで粘着性をもった両面テープに変えてみた。根気のいる作業であったが、巻きつけられたねじり両面テープが面になっていくにつれ、だんだんクモの巣らしい雰囲気が出てきた。「冬まつり」では、「クモ」グループは「クモ研究所」の劇を行った。劇のタイトルは「こちらクモ研究所」で、子どもクモ博士たちが、クモについて学んだことを発表した。こうして、体験を通して発表したことは、自信に繋がった。

**【考察】** クモの「発見・観察」から始まり、「調べる」「製作」「ごっこ遊び」「表現」へと発展していった。それぞれの活動を通して、「クモ」への親しみや興味を深めていった。さらに探究心に繋がるなど、「子ども主体」の取り組みとなった。一つ一つの活動が、繋がり、織りなし、発展していく中で、子どもたちはテーマを深めていき、様々な力を獲得していった。このような、子どもと掛け合いをしながら一緒に歩いていく取り組みは、保育者にとっても楽しいものであった。ドラマと学びが結び合っていくようで、子どもたちの学びに保護者自身も手ごたえを感じた。この実践の中で十分に深められなかったことに、命の問題がある。知識や配慮のなさから、クモを死なせてしまったことに、子どもたちはショックを受けた。「命」をどう学ぶかは、次の取り組みへの大きな課題となった。